

Civis Magazine PERIPLUS

政治は、私たちの物語のあらすじを決めるもの

新聞への投書。
それが政治に興味を持つようになったきっかけだと語るのは、現在高校3年生の宇恵野珠美さん(18)。

「中学3年生の時に新聞の記事の切り抜きを書く授業があって新聞を面白いと感じました。それから新聞というものに興味を持つようになって、それまで家では新聞を取っていませんでしたが、購読するようになりました。それからしばらくは単純に新聞を読むだけでしたが、高校1年生の時に道徳科目の点数化に関する記事を読んだんです。その際私自身も道徳の点数化というものに疑問を感じたので、思い切って新聞の投書欄に投稿したんです。そしたらその投稿が掲載されて、後日私の投書に対する意見がネット上に上がっていたんですね。自分の意見が世の中に発信されてそれに対して反応が返ってくるということが、自分の意見が認められた気がして嬉しかったんです。それがきっかけで、今までは政治は政治家とか一部の人がやるものだって思っていたのが、自分の思ったこととかを発信すれば意見としてちゃんと受け止めてもらえるということが分かって、政治に興味を持つようになりました。」

宇恵野さんはこの経験で、初めて自分が考えることに意味があると感じたとも語ってくれた。

その後もっといろいろな人と意見交換をしたいと思った宇恵野さんは、不特定多数の人と時事問題等の意見交換を目的にしたサイトの立ち上げなどを試みるものの、なかなか上手くいかず、試行錯誤を繰り返したという。それならば身近なところからと考え、高校2年生の時“たま時事”というものを始める。

これは、クラスの黒板の隅に300字程度のスペースをもらい、一日1つ宇恵野さんが選んだ新聞記事の要約を書く、というものだ。

「身近なところから意見交換ができればと考えたんですが、皆が社会問題について知らないという意見交換はできないので、まずは知ってもらうところから、ということで始めました。始めてみたところ、同級生の皆



宇恵野珠美さん(18歳)

2002年生まれ。神奈川県出身。
高校1年生の時新聞に投書をしたことがきっかけで政治に興味を持つ。その後同級生と時事問題について意見交換をしたいという思いから自身で選んだ新聞記事の要約を紹介する“たま時事”を教室の黒板に書くようになり、コーナーとしてクラスに定着。

から記事に対する意見をもらったり、クラスで休み時間に社会問題が会話の話題にのぼるってことがありました。」

昨今、若者の政治的無関心が取り上げられることが多いがこれについて宇恵野さんは、
「たま時事をやっていると感じたのは、”若者は政治に対して無関心ではない”ということです。高校生だって社会問題を知ればそれに対して思うことはあるし、こういう風にしたいと思って色々意見を言うようにもなったりするんですよ。実際、私がクラスで取ったアンケートでは9割の人が“時事問題に興味がある”と回答していました。ただ、今はSNSとかを使えばいくらでも自分にとって興味のある情報を得られるので、そんな中わざわざ政治や社会問題、経済の話題を知ろうとはしない、つまり優先度が低いだけだと思います。なので、知る機会さえあれば若者は政治にもっと関心を持つようになっていくと思っています。」と語る。

若者と政治の距離感については、
「SNSやインターネットの普及によって政治家との距離自体は昔よりも近くなっていると思います。パブリックコメントの投稿はメールで出来ますし、政治家へのメッセージもSNSを通して気軽にできる環境です。でもだからといって”政治に参加するか”といえは普通の人は参加しない、私も新聞を読んでいなかったら参加していないと思います。実際にたま時事をやっていた時も皆意見は言うんですけど、『どうせ俺たちが考えたところで、国は変わらないよな』って同級生がボソッと聞いたのを聞いたりしました。そもそも政治に参加する手段で一番手っ取り早いのは投票することだと思います。でも今の若い世代の多くはいきなり“投票しましょう”と言われても、社会のこととかを特に学生はまだよく知らないのだから、投票するにしても判断の仕様がないうちにあるんだと思います。なので、学校とかで政治や社会問題についてもっと知ることができたり、政治家に自分たちの意見を届けることができるという実体験などを経験する機会がもっと増えれば、若者と政治の距離ももっと縮まって、より幅広い人が参加するようになっていくと思います。」と語ってくれた。

その為には、先生が政治的中立を維持しながら少ない労力で社会問題に対する様々な見方を最新の状態で生徒に提供できること大切であり、将来はそのような教材の開発に携わりたいという。

最後に宇恵野さんにとって”政治とは”を伺った。

「私のイメージなんですけど、私たちは全人類で1つの物語を紡いでいるイメージなんです。新聞はそのその物語の連載小説でそれを日々の出来事という形で皆で書いているんです。そのなかで政治っていうのは物語の大まかなあらすじを決めているものだと思うんです。”政治”という権力の行使とか資源の再配分とかもありますが、それがどう使われるかによって私たちが生きていく物語がハッピーエンドになるかバッドエンドになるかが決まってくんじやないかなと思います。せつかく自分が生きていく物語なので、ハッピーエンドにしたい、だから私は政治に参加したいと思っています。」

黒板のいちスペースから始まった、”たま時事”。
分量的にはそれほど多いものではないのかも知れない。しかし、その“ちょっとした”取り組みが結果的にはクラスで政治や社会問題が日常会話で話題にのぼるようになるという大きな結果を生んだ。これは、たま時事の存在が同級生にとって身近なありふれた存在として浸透した証ではないだろうか？身近な存在になれば、自然と会話の話題にもなりそれが続くことで意識することなく意見交換や知識を得ることができるようになり、それが若者の政治参加にも繋がる。

大切なのは、ちょっとした気軽に触れ合える“政治”なのではないだろうか？